

別項に掲げたように、初めてのところみとして8月7～9日、東北民教研の技術教育分科会と合同で、全国大会を開こうと計画している。皆さんの御協力・御支援を期待してやまない。

技術高校 - 公共職訓と高校との連携

佐々木 享

I

後期中等教育の多様化という政策によって高等学校職業課程の細分化・多様化がすすんでいる。多様化政策はまた、各種の職業訓練と高校との連携というかたちでもすすめられている。神奈川県は技術高校制度もその一つである。

神奈川県は技術高等学校（以下技術高校という）は、1963年4月に平塚、川崎、横浜、大船の4校が発足し、その後追浜、相模原、秦野の3校が分校から独立校となったので現在7校存在する。（神奈川県には技術高校をふくめて16の職業訓練所がある。）67年末に、日教組によって行なわれた川崎技術高校と横浜技術高校の調査に参加して知り得た実態の概要を報告する。

制度面からみた技術高校の特色はつぎの3点に要約される。

①技術高校（定時制）の第1学年は昼間全日制であるが、この1年間、生徒は高校1年生であると同時に公共職業訓練の訓練生でもあること。

②第1学年で行なわれる職業訓練のうち、かなりの部分が高校教育の専門科目の単位として認定されること。

③第2学年から第4学年までは、昼間は就職先で就業し、週のうち昼間1日（全日）と夜間2日のみ登校すること。

つまり、技術高校制度というのは1年課程の公共職業訓練と定時制高校との連携なのであり、技術高校には「〇〇技術高等学校」と

「〇〇職業訓練所」との二つの看板がかかっているのである。ところで、61年の学校教育法改正によってつくられた連携教育制度は3年課程の職業訓練と定時制・通信教育との連携であったから、技術高校は5年間にわたって法的にはもぐりの存在であった——文部省は、これを黙認してきたのである。

技術高校に設置されている学科の種類は、機械工作科（6校）機械仕上科（5校）機械製図科（2校）溶接科（4校）、電気工作科（2校）板金工作科（2校）電子技術科（2校）印刷（横浜のみ）、自動車整備科（2校）であって、いずれも本来の職業訓練の課程であり、高校の学科としては他県に例をみない技術高特有のものが大部分である。

技術高校と職業訓練所の併設の形式も多様であって、大船は職訓の4課程がそのまま技術高校の4学科であるが、川崎では高校の5学科のほか職訓のみの1コースがあり、横浜のばあいには職訓・技術高校連携コースが4学科で、このほか職訓のみの課程が12もあるというぐあいである。

II

第1学年では、高校の授業と職業訓練とがまったく別に行なわれるのではなく、高校教育として行なわれる普通科目の一部が同時に職業訓練の普通科目とみなされ、また職業訓練の一部が高校教育としての実習および専門科目とみなされる。66年度入学の生徒に適用されているカリキュラムについていえば純然たる高校教育として行なわれているのは普通科目（国語2、社会2、数学2、理科2、保健2、外国語2）12単位だけで、職業訓練として行なわれているところのうち11単位分が高校の単位として認定されている（67年度以後の入学生のばあいにはじつに22単位分——うち実習が15単位を占める——が高校教育として認定されている）。ふつうならば4年間にわたって徐々に展開されるべき専門教育のうち、ひじょうに大きな部分が第

1 学年でおわってしまうのである。

職業訓練のばあいの訓練内容は、高校教育のような単位認定制ではなく、それぞれの職種に応じて年間 18000 時間の訓練内容が各種の学科・基本実習・応用実習ごとに時間数によって規定されている。したがって職業訓練はその時間数に従って、はじめは専門の学科が多く、半ばになると基本実習が多く、さいごには応用実習が大部分となるように詳細に計画され展開される。職業訓練は 1 か年で修了しなければならないから、授業計画において職訓の計画が優先するのは当然であろう。授業は年 4 8 週間行われる。横浜技術高校機械工作科を例にとりて週 3 9 時間の配分をみると、4～7 月の座学(専門科目と普通科目の講義)時間数は平均 2 2 時間、これが 8 月後半から 1 0 月までのあいだには 1 8 時間となり、1 1 月からは専門科目の座学はなくなり普通科目のみ週 6 時間(2～3 月は 4 時間)が行なわれるにすぎない。3 9 時間から差引いた残りの時間はすべて実技が行なわれる。

技術高校では、第 1 学年の普通科目の学習がはじまると同時に専門科目・実習がはじまり、しかも実習の大半は第 1 学年だけでおわってしまう。その実習の設備は、一年課程の職業訓練(単能工の養成が主目的)の基準にしたがって充足されたものであるから、工業高校に比較するとまことに貧弱である。

第 1 学年では毎日の授業のなかの実習=職訓の時間が多いため、横浜技術高校 1 年生全員に対する「訓練生と技高生のどちらに重きをおいているか」という問への回答をみると 4 9.5% の生徒は技高生に重きをおくと答え両者同じくらいという者が 3 6.4%、訓練生という者 1 4% となっている。

第 1 学年の「連携」こそが技術高校最大の特色であるはずなのに、連携を効果あらしめるための、職訓の指導員と高校教師との話し合の場はほとんどないようにみうけられた。また、職業訓練のどの部分が高校の単位となっているのかという点もかなりあいまいであるようにみうけられた。表は、6 7 年入学生に適用されているものである。

表 認定されている科目名・単位数・訓練内容の例

学科	科目	単位数	対応する訓練内容 ()内は訓練時間
機械 機械 工仕 作上 科科	機械実習	1 5	実習 = [基本(600) + 応用(374)] / 2
	機械製図	2	機械製図(70)
	機械工作	3	機械工作法(105)
	機械電気	2	材料(35)・材料力学 (15)・電気工学大意 (15)・機械工作大意 (60)
	計	2 2	
機 械 製 図 科	機械実習	1 5	実習 = [基本(490) + 応用(538)] / 2
	機械工作	2	機械工作法(60)
	機械設計	3	機械設計(70)
	材料	2	材料(40)
	機械電気 計	2 0	機械工学大意(70)

III

職業訓練の修業年限は 1 年なので、生徒は第 1 学年が終ると職訓の修了生として、職訓=学校のあつせんで、2～4 学年の 3 か年昼間 1 日・夜間 2 日登校するという条件を認める企業に就職する。第 2～4 学年は純然たる技術高校生となる。2 年以上の登校する曜日は学年ごとに異っており、原則として全校生徒が一堂に会することはない。登校日がずらしてあるから、教室はクラス数はいらぬといふことであろうか、どの技術高校でも普通教室の数はクラス数の 6 割くらいしかない(1)

6 6 年 4 月までに入学した者に適用されるカリキュラムによれば、高校としての専門科目 4 5 単位のうち 1 1 単位が職訓の訓練を認定したものである。残りの専門科目 3 4 単位のうち実習が 2 4 単位(毎学年 8 単位×3)を占めているが、この 2 4 単位のうち 7 割(1 6.8 単位)は生徒の就職先の仕事を「現場実習」として認定している。ところで、就職先の仕事と学習との関係について横浜技術高校 2～4 年生全員に問うたところ、3 2.8% の者がほとんど関係ないと答えており、「まったくびったりである」と答えた者は 1 2.5% にすぎなかった。教師の巡回は年 3 回くらいということであった。あまりのずさんさに気がひけたのか、この「現場実習」は 6 7 年度から廃止され、その分だけ職訓の認定部分が増加された。——それでも高校として行われる専門教育は 2 0 単位にすぎない。

新時代の技能者養成をうたっている技術高校は、高校教育として全く片方であるだけでなく、専門教育が少なく且つ大半が第 1 学年でおわってしまうなど、技能者養成教育としてさえ不十分なものだといわざるを得ないのである。